様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２１１２

研究課題名（和文）友敵感情論を基軸とした「共通感覚」の倫理学の構築：シンパシーからテレパシーへ

研究課題名（英文）Constructing an Ethics of "Common Sense" based on the Friend-Foe Affect Theory: from Sympathy to Telepathy

研究代表者
宮崎　裕助（Miyazaki, Yusuke）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：４０５０９４４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「共通感覚」の倫理学の構築を企てるために、人間と動物、家族愛と友愛、美的感性と崇高、共同体と他者感覚、信への問いと歴史感覚といった複数の主題に即して課題を推進することによって成果を蓄積することができた。発表形態では、単著の刊行、学術誌や単行本への寄稿、国内外での学会発表、また商業誌やインターネットでの発信を通して、成果の公表を継続的に実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今日世界中で宗教的・民族的な紛争が激化し続けており、近年焦眉の課題となっているのは、人々の集団的情動が社会規範や政治的決定に及ぼす作用についての研究である。本研究が提案する共通感覚の倫理学は、こうした今日的要請に明確に答えるものである。これは大衆の情動的同一化に帰結しない「距たりの共鳴」としての人々の絆を構想し、単なるシンパシー（同情）やエンパシー（感情移入）ではない「テレパシーの倫理」を打ち出す。かくして機能不全に陥りつつある現代の政治原理を根本から問い直す仕方で独自の情動倫理学を構築するという点に、本研究の学術的および社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：In order to attempt to construct an ethics of the "common sense," this research has been accomplished by promoting its study on multiple subjects such as humans and animals, family love and fraternity, aesthetic sensibility and the sublime, community and the sense of otherness, question of faith and sense of history, etc. The results were published continuously and broadly through single-authored publications, contributions to academic journals and books, conference presentations domestic and international, and disemmination in commercial journals and on the Internet.

研究分野：哲学　倫理学　現代思想

キーワード：共通感覚　友愛　共同体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来アリストテレスに端を発する共通感覚論は「諸感覚に跨る感覚」に関わり、「他者との共通の感覚」の議論とは別物とされてきた。しかし近年の研究ではアリストテレスの友愛論（『ニコマコス倫理学』）のうちにもう一つの共通感覚論の原型（アリストテレスの用語ではsynaisthanesthai）が指摘されている。例えば、デリダの友敵論がピエール・オバンクのアリストテレス研究を踏まえながら行なったのはこの方向での解釈である（ただしデリダの議論は明示的には共通感覚論ではない）。本研究は、「友の不在においてこそ湧き起こる感情」や「友と敵の表裏一体の感情」といったデリダの友敵論に着想を得て、アリストテレスに由来する二つの共通感覚論の総合を試み、現代の問題意識へと関連づけることで、新たな共通感覚論の構築を図ることである。

２．研究の目的

本研究の目的は、友敵感情論の視座から「共通感覚」の概念を再検討することで、現代倫理学の新機軸を追究することである。共通感覚の概念は、古代（アリストテレス～キケロ）から近代（カント）を経て現代（アーレント）に至る長い哲学史のなかで継続的に問い質されてきた。だが、この概念は「五感に共通の感覚」と「他者との共通の感覚」という二つの系譜に分裂することで、当の感覚が人々の社会規範や集団形成にとっていかなる倫理的含意をもつのかが充分に解明されてこなかった。本研究は、研究代表者がこれまで取り組んできたカント美学および友敵感情論の成果を基盤として「共通感覚」の系譜を把握することで「情動の倫理学」の新地平を切り拓くことを目指す。

３．研究の方法

本研究は「共通感覚」という大きな主題を扱うにあたって三つの段階を踏むことにより達成される。第一に、カントの共通感覚論を現代的解釈の広がりのなかで概観し再検討する。これにより、共通感覚概念の社会的および今日的な意義が把握・整理される。第二に、従来の友敵論の成果を基盤とすることにより、アリストテレス以来、カントを経て現代にいたる共通感覚論の系譜を描き出す。これにより、従来二分してきた共通感覚論の総合的解釈を打ち出す。第三に、こうして共通感覚論の歴史的射程を把握することを通じて、いかなるアクチュアリティにおいて新たな「情動の倫理学」の可能性を開くものであるのかを追究する。

４．研究成果

（1）2016 年度の研究成果は、第一に、共通感覚としての政治的情動の基礎をなす、いわば世界感覚に関して、西洋哲学史に見られる人間／動物の区分の再検討を通じて、両者の対照とこの区分に潜む歴史的偏見を解明した（論文「人間／動物のリミトロフィー」）。

第二に、共通感覚を形成する親密性に関して、アリストテレスの友愛論を取り上げ、ジャック・デリダとジョルジョ・アガンベンの立論の対比から、友愛の本質をなす、慈愛の非対称性を解明した（国際学会での発表「Towards Another Aristotelian Tradition of Friendship」）。アリストテレスのこの非対称の友愛論が指し示すのは、いわば「死者への愛」という不在の対象への友愛を、例外とするどころか範例として、まさにそうした不在から出発して友愛の可能性の条件を思考しているということである。つまり、死者をも愛することのできる能動的で一方的な友愛がなければ、友愛の本質は思考不可能なままにとどまるのである。

（2）2017 年度の研究成果は、第一に、共通感覚論にとっての歴史的に特権的なトポスとしてカント哲学をとりあげ、その系譜を再構成した（論文「フランス語圏のカント受容――「人間」以後の超越論哲学の行方」）。本論文では、当該の系譜の焦点は崇高論を中心とした感性論の再構成にあるということが示され、それを通じて本書の美感的感性論が、共通感覚論としてたんに友敵感情を媒介する調和の役割を果たすのみならず、まったき他者へと自己感情を開放する「不調和

の調和」の可能性をもつということが見通された。
第二に、本研究の共通感覚論にとっての特権的な参照項であるジャック・デリダの言語論とその家族論とをとりあげ、共通感覚の倫理学にとっての諸前提を解明した（論文「差延、あるいは差異の亡霊――ジャック・デリダによるソシュール再論」および「家族への信――デリダと絆のアポリア」)。

（3）2018 年度の研究成果は、第一に、共通感覚の他者論を検討した。共通感覚論の射程を政治哲学の問いとして展開した哲学者にハンナ・アーレントがいる。アーレントの『精神の生活』に見出される「思考の風」の契機は、判断力が働く手前の没利害的な前提をつくり出すことで、判断力が基盤とする共通感覚にとって不可視の他者を垣間見させることを可能にするのである(学会発表「政治的判断力はなぜそう呼ばれるのか――アーレントの判断力論再考」)。
第二に、共通感覚に伏在する信の感覚を追究した。本研究の共通感覚論にとっての特権的な参照先をなすジャック・デリダの思想をとりあげ、デリダの脱構築がいかなる歴史的前提に基づいているのかを解明した（学会発表「Confronting the Lutheran Legacy of Deconstruction: Heidegger, Derrida, Nancy」)。共通感覚の歴史にはキリスト教の伝統に特有の信の感覚が組み込まれており、宗教の回帰が取り沙汰される現在、キリスト教の脱構築が、その信の共通感覚の他者にとって必須となる。

（4）本研究の最終年度である 2019 年度の研究実績は、第一に「共通感覚」の展開がカントの『判断力批判』の再解釈によって提示しうるものとなることを書評論文(「ゲルノート・ベーメ『新しい視点から見たカント『判断力批判』」書評」)と、ハンナ・アーレントの判断力論に即して解明した(論文「政治的判断力と観想的判断力を架橋する――アーレントの判断力論再考」)。カント美学にはヨーロッパ啓蒙期の近代社会の市民が基づく趣味判断のパラダイムが素描されており、人々の共有する共通感覚の枠組を提示することによって、市民的教養の開化と陶冶を推進することが準備されていた。
第二に、「共通感覚」の倫理学は、ひとつの歴史的感覚への応答として説明しうることを明確にした。このことを、デリダの系譜学的脱構築の企てに沿って論じた(「「歴史をつくる」――ジャック・デリダの系譜学的脱構築にむけて」)。歴史において嘘とされた言明には、当の概念があらかじめ準拠しうる事実存在しないことがままある。実のところ歴史的出来事には「真理をつくり出す」次元があり、ここに孕まれる「真理への感覚」をデリダは究明するのである。

本研究の主要な成果は、研究代表者の単著『ジャック・デリダ――死後の生を与える』(岩波書店)へとまとめることができた。また関連して、訳書(付解説)ロドルフ・ガシェ『脱構築の力』(月曜社)の刊行によって、関連する問題設定をさらに展開することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 スタンリー・カヴェル（宮崎裕助・高畑菜子訳）	４．巻 14
２．論文標題 近代哲学の美学的諸問題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 知のトポス	６．最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮崎　裕助	４．巻 46-2
２．論文標題 プロト脱構築について――ルター、ハイデガー、デリダ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 254-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アレクサンドル・コイレ（小原拓磨・宮崎裕助訳）	４．巻 13
２．論文標題 フランスにおけるヘーゲル研究の状況報告	５．発行年 2018年
３．雑誌名 知のトポス	６．最初と最後の頁 99-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮崎 裕助	４．巻 24
２．論文標題 シラーの「遊戯衝動」から、カントの「物質的視覚」へ――ポール・ド・マンの歴史的唯物論にむけて	５．発行年 2016年
３．雑誌名 シェリング年報	６．最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 フランソワーズ・ダステュール（宮﨑裕助・松田智裕訳）	4．巻 12
2．論文標題 差異の問い――デリダとハイデガー	5．発行年 2017年
3．雑誌名 知のトポス	6．最初と最後の頁 91-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮﨑 裕助	4．巻 120
2．論文標題 「歴史をつくる」――ジャック・デリダの系譜学的脱構築にむけて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6．最初と最後の頁 109-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮﨑 裕助	4．巻 4
2．論文標題 政治的判断力と観想的判断力を架橋する――アーレントの判断力論再考	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Arendt Platz	6．最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Yusuke Miyazaki
2．発表標題 Confronting the Lutheran Legacy of Deconstruction: Heidegger, Derrida, Nancy
3．学会等名 6th DERRIDA TODAY conference（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 宮﨑 裕助
２．発表標題 政治的判断力はなぜそう呼ばれるのか――アーレントの判断力論再考
３．学会等名 アーレント研究会第17回大会 シンポジウム「アーレントvs カント――政治・自由・判断力」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮﨑 裕助
２．発表標題 デリダと「歴史の思考」――亀井大輔著『デリダ 歴史の思考』をめぐって
３．学会等名 脱構築研究会・立命館大学間文化現象学研究センター 合同研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yusuke Miyazaki
２．発表標題 Towards Another Aristotelian Tradition of Friendship: Derrida and Agamben
３．学会等名 5th DERRIDA TODAY Conference（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 宮﨑 裕助
２．発表標題 人間／動物のリミトロフィー――ジャック・デリダによるハイデガーの動物論講義
３．学会等名 動物をめぐる形而上学的思考の行方――ハイデガーとデリダ
４．発表年 2016年

１．発表者名 宮﨑 裕助
２．発表標題 出来事としての構想力――カントにおける数学的崇高の問い
３．学会等名 哲学会 第55回研究発表大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 宮﨑 裕助
２．発表標題 家族への信――デリダと「きずな」の問い
３．学会等名 家族の「きずな」を哲学する――私たちをつなぐものはどこにある？
４．発表年 2016年

１．発表者名 宮﨑 裕助
２．発表標題 情動の同一化と政治的パニック――フロイト集団心理学のポピュリスト・モーメント
３．学会等名 小寺記念精神分析研究財団 学際的ワークショップ「精神分析の知のリンクにむけて」第四回「精神分析と人文学」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮﨑 裕助
２．発表標題 いかにして国家は創設されるのか――ジャック・デリダの「アメリカ独立宣言」論を読む
３．学会等名 慶應義塾大学大学院法学研究科 政治思想研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計8件

１．著者名 宮﨑裕助ほか共著、檜垣立哉・小泉義之・合田正人編	４．発行年 2018年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 512
３．書名 ドゥルーズの２１世紀	

１．著者名 牧野英二編	４．発行年 2018年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 371
３．書名 新・カント読本	

１．著者名 松澤和宏編	４．発行年 2018年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 340
３．書名 21世紀のソシュール	

１．著者名 岩野卓司編	４．発行年 2017年
２．出版社 書肆心水	５．総ページ数 320
３．書名 共にあることの哲学と現実――家族・社会・文学・政治	

1．著者名 齋藤元紀・澤田直・渡名喜庸哲・西山雄二編（宮﨑裕助「人間／動物のリミトロフィー――ジャック・デリダによるハイデガーの動物論講義」51-78頁担当）	4．発行年 2016年
2．出版社 法政大学出版局	5．総ページ数 398
3．書名 終わりなきデリダ	

1．著者名 秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編（宮﨑裕助「カント――超越論的構想力と構想－暴力」87-94頁担当）	4．発行年 2016年
2．出版社 法政大学出版局	5．総ページ数 346
3．書名 続・ハイデガー読本	

1．著者名 宮﨑 裕助	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 376
3．書名 ジャック・デリダ――死後の生を与える	

1．著者名 ロドルフ・ガシェ（宮﨑裕助編訳、入江哲朗・串田純一・島田貴史・清水一浩訳）	4．発行年 2020年
2．出版社 月曜社	5．総ページ数 272
3．書名 脱構築の力――来日講演と論文	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考